

丹羽あれこれ

丹羽郷土史研究会員 小島 辰男 調

丹羽村

丹羽村は丹羽郡の西端に位置し、東は時之島村、西は佐千原村、南は一宮村、北は西浅井村に接していた。(ここで言う丹羽郡とは、犬山市・扶桑町・大口町・江南市・岩倉市及びほぼ大江川以東の一宮市東部地域のこと。詳しくは文末の地図参照。)

『丹羽地名考』や『一宮市史』によると、丹羽は爾波神社が鎮座する土地で、丹羽郡の主郷つまり丹羽臣(にわのおみ)あるいは爾波県君(にわのあがたのきみ)の本貫地(出身地)であったという。丹羽臣(にわのおみ)の祖神は神八井耳命(かむやいみみのみこと)とされている。

『尾張国地名考』は、「爾波とは止水(たまりみづ)の象形にして、正字庭田之水(にわたづみ)を略して丹羽むらと呼べる。船路においては波穏やかにして平坦なる海面を爾波とも言えり。ただ広狭の違いこそあれその意は同じなるべし」と丹羽村を解説している。これは、丹羽村は水辺の村であり、大江川や木曾川の氾濫水にたびたび見舞われていた土地だったということを意味していると思われる。

爾波神社

爾波神社の現在地は丹羽字宮浦1410番地である。『尾張名所図会』には、もとは大江川の東の字天神という地にあったが、寛文6年(1666)に現在地に移った。そのため昔の社地を古宮というように記されている。また『一宮市史』では、爾波神社は初め大江川の東にあったが、寛文6年に現在の地にあった砂洲を開墾して遷座し、併せて字古屋敷にあ

った人家も共に移ったと詳しく述べている。つまり、丹羽村の集落も爾波神社も昔は大江川の東にあったが、たびたびの水害により、大江川西の現在地に引っ越した歴史があるということである。

爾波神社は式内社で戦前は郷社に列せられていた。延喜神明式には丹羽郡爾波神社・尾張国内神明帳には従三位爾波天神・奉唱国内神明帳には従一位丹羽天神と記され、俗に明神社・丹羽大明神社などと呼ばれてきた。祭神は神武天皇の子で^{すいぜい}綾靖天皇の兄にあたる^{かむやいみのみこと}神八井耳命である。『尾張名所図会』には「今は当村のみの^{うぶすな}生土神（氏神・守護神）となりたまへど、実際は丹羽郡の総氏神なり」とある。

『一宮市史』に、「思うに、（丹羽の）爾波神社は東を向いて丹羽郡を見守り、（犬山の）大縣（大県）（^{おおあがた}おおあがた）神社は西を向いて丹羽郡を見守っている。このことは大いに故あるものと考えられる」と書かれている。

大縣神社は犬山市の本宮山の麓にあるが、尾張国^{にわのあがた}爾波縣（丹羽県）を切り拓いた土着の豪族・爾波氏が祖神として祀られており、祖神名は^{おおあらたのみこと}大荒田命とする説が有力である。

爾波氏と丹羽氏の関係は判然としないが、一説には爾波氏は祭祀を司り、（中央から派遣されてきた）丹羽氏が徴税にあたったという。やがて爾波氏と丹羽氏の間には姻戚関係が生まれていったと思われる。初め爾波氏が（爾波縣の）東にあり、後に丹羽氏が西に来たとする説である。

三輪社

三輪社は爾波神社の北西約280メートル（一宮市丹羽字大塚1811）に位置しており、爾波神社の境外社とされる。

大塚という名前が示すように神社地はやや小高い丘になっている。昔はもっと大きな丘であったらしいが、大江川の堤防修築のために大量の土砂が流用されたらしい。浅井地内には古墳群が存在するので、この三輪社の地も古墳である可能性が高い。(本シリーズ008「大江用水とは」参照)

この三輪社の祭神は大和の大物主命(おおものぬしのみこと)である。奈良県桜井市に大和国一宮である大神(おおみわ)神社 三輪明神・三輪神社とも表記——があって、ここに大物主命が祀られている。また、一宮市花池(大和町)にも奈良(大和国)から移り住んだ人たちが創始したという大神神社があり、真清田神社と並んで尾張一ノ宮と称されることがある。

以上はすべて「ミワ」、「ヤマト」でつながるが、中島郡を支配した有力豪族に三輪氏があったことと関係しているのではないだろうか。中島郡一宮村 中世の中島郡北条美和郷と推察される 隣接する丹羽村に「三輪社」があるのは決して不自然ではない。

『一宮市史西成編』にあるように、爾波神社と同様に三輪社も重要な存在であるような気がしてくる。

東光寺

東光寺の現在地は丹羽字宮浦1415番地であり、爾波神社の東に接している。臨済宗妙心寺派で、もとは葉栗郡黒田の宝光寺の末寺であったが、今は本山直末寺(直属の寺)となっている。

当寺は天安2年(858)の創建で、もとは大江川の東南の字古屋敷にあったと伝えられ、かつては爾波神社の社僧が祭祀を司っていた。そのため、寛文6年(1666)に爾波神社を現在地に遷座したとき、共に移ったといわれている。

有隣舎

丹羽村の「有隣舎」は鷲津一族によって維持・運営され、近隣のみならず周辺諸国にまでその名を知られた私塾であった。初代の鷲津幽林が自分の故郷丹羽村に「万松亭」を建てて多くの書籍を集め、好学の人々がここで学んだことに始まったとされ、今なお「丹羽の先生」と尊称されている。

幽林以降、松陰・益斉・蓉裳・順光の五代に亘って数百人の塾生を指導し、その家系門人に有名な学者や詩人を多数生んだ。私塾は、幽林の次は二男の松陰が継ぎ、三代は松陰の長男益斉が継いだ。益斉の時代に「万松亭」の名を「有隣舎」に変更した。

益斉の長男毅堂は東京へ出たので、四代目は益斉の二男である蓉裳が継いだ。五代目順光の時代に入ると新しい学制ができて中等校が建設されるようになり、塾の必要性が弱まったので明治40年ごろ、有隣舎は130年に亘る歴史の幕を閉じた。

東京へ出た毅堂の娘・恆は詩人永井采原^{さいはら}に嫁いだ。その長男が文豪永井荷風である。また童謡歌手として有名な小嶋くるみ（鷲津名津江 / 現在は英文学児童文学者で大学教授）は五代目順光の孫にあたる。

鷲津幽林は享保11年（1726）丹羽村に生まれた。13歳の時名古屋に出て医師藤原佩蘭^{はいらん}に学び、22歳の時京都に出て、伊藤仁斎の学風を慕って芥川丹丘・武田梅龍の門人となり勉学に励んだ。やがて、師梅龍の推薦により妙法院宮法親王から召され侍読（ご進講役）となった。数年後、母から病気の知らせを受けて帰郷した。その後名古屋に出て医者を開業し後年丹羽村へ帰ったが、幽林の人柄を慕って学徒が集り、いつしか私塾になっていった。

天明3年（1783）に尾張藩藩校である「明倫堂」が再興開校され、招かれて教授を

務めた。更に、妙法院親王から再びお召があって侍読を務めた。寛政2年（1790）病に陥り、丹羽に帰郷して同10年に亡くなった。（享年73歳）

なお、墓碑は一宮市丹羽字虚空蔵にある。

[参考]

北 →



* 水色は大江川

* 浜神明社は倭姫命伝説で有名